

稲上毅「社会学の方法」

「ある社会状況を人びとがどんな風に定義づけているかをみる。というのも、その定義づけにもとづいて人間は行動しているからです。さらに、その行為における目的と手段の関連を人びとがどうとらえているか。その背景にどんな集団的規範が働いているのかも知りたいですね」（稲上ほか 2015: 9）。

「こうして事実を洗っていくと、必ず浮かび上がってくるテーマがあります。「意図した行為の思わざる結果」という問題です。パラドックスとかジレンマとか、アイロニーとか矛盾とか、そういうことです。そうしたものをみることで議論に奥行きがでてくる。意図した行為の図式だけみてもだめですね」（同）。

「そのうえで、社会関係の質について議論する必要があります。何かというと、競争と協調とか、連帯と排斥とか、支配と抵抗とか、同調と逸脱とか、忠誠と反逆とかそういうことです」（同）。

「人びとが編みあげている「生活世界」（Lebenswelt）も知りたい。人びとは自分たちの世界をどのように作りあげ、どんな風に外部の世界をみているのか。それは、社会関係の質を理解するという作業と密接不可分に結びついています。その人たちの目線に沿って、できればその息づかいを知るということです」（同）。

「行為論的なものの見方、主体に沿ったものの見方、「意図した行為の思わざる結果」、それに社会関係の質の分析ですね。質的調査の説得力の高いものは、そういう性格をもっているのではないかと思います」（同）。

「初めからたくさんのことを同時に理解することはできない。それで対概念をつくって、理念的に事象をモデル化してみる。要するに、観察の物差しづくりですね。その物差しのづくり方は理念的になりますが、社会的現実のほうははるかにデリケートなものですから、忠誠と反逆、競争と協調、そういう相反する要素が複雑に絡みあっている。多くの場合、実際に見いだせるのは協調的競争とか、面従腹背とかいったものですね」（同: 10）。

「いくつかの事例調査から何がいえるかについて考えるとき、やはり比較が問題になると思うのです。たとえば歴史比較、クロスセクション比較、国際比較ですね。これは人間のもっている認識の基本機能であり、早いとか遅いとか、重いとか軽いとか、明るいとか暗いとか、何かと比較することによって人はものごとを認識することができる」（同）。

「もちろん、 $y=f(x)$ の y の「結果」がどうなっているかを明らかにすることだけでも、立派な研究になることがあります。日本とアメリカを比べてみると、通念とは違ってこういうところが同じだとか。あるいは、みんなが同じだと思っていたが実は違うということがはっきりすれば、それは大発見かもしれない。それだけでもいいのですが、願わくは「原因」のほう、つまり右辺のほうも調べてほしいと思います。たとえば3つの変数、 x_1 、 x_2 、 x_3 という3つの「原因」が働いて、ある「結果」(y_1)を生み出しているといった発見ですね」(同)。

「ひとつの調査対象がもつ個性(結果)というのは、複雑ないくつかの変数がそれぞれ特定の値をとることで生み出されているということ、その理解には原因の解明とともに、何らかの比較が欠かせないということです。こうして、事象のもつ個性を描き、その因果関係を推論し、さらには類型を抽出していくことができるかもしれない。結果として、すべて比較をしていることになるのではないかというのが私の考え方です」(同: 11)。

「分析にあたっては、こういうことを知りたいという問題意識を鮮明にしておくことが大事です。まず、なぜ知りたいのかについてはっきりとした自覚をもつこと。最後にまとめるときには、否応なく自覚させられますがね」(同: 12)。

「今だったら、どういうテーマに狙いを定めるか。そこから歴史と世界がどう垣間みられるか。そういう問題意識をもって時代のテーマに切り込んで行ってほしいですし、そうすれば、きっとよい論文になるのではないでしょうか」(同: 19)。

出典：

稲上毅・石田光男・八幡成美・池田心豪, 2015, 「座談会・労働調査で大切なこと——これからの質的調査に向けて」『日本労働研究雑誌』 Vol.57, No.12, pp.4-21.

<http://www.jil.go.jp/institute/zassi/backnumber/2015/12/pdf/004-021.pdf>